

図書紹介

井田仁康 編著

『地域と教育—地域における教育の魅力—』

外池 智*

本書は、2000年当時、新進気鋭の教員であった編著者が、かつての筑波大学大学院博士課程教育学研究科の授業を初めて単独で開講した「社会科教育学特講」の10年に及ぶ成果である。編著者は、本書の目的を「地域の特性を踏まえた教育を明らかにする目的と、大学院での社会科教育学の教育方法を提示する」二つであるとしている。前者は、社会科教育の本質的課題のみならず、学校や教育そのものの在り方を問うものであり、後者はそれに関わる研究者・教員養成の在り方を問うものである。本書の構成は、以下の通りである。

はじめに

- 第1章 東京の地域と教育
- 第2章 愛媛の地域と教育
- 第3章 宮崎・広島 of 地域と教育
- 第4章 沖縄の地域と教育
- 第5章 韓国・ミクロネシア連邦の地域と教育

編著者は、毎年この授業において大学院生と共に対象地域を選定し、実際にフィールドワークを実施し、その成果を『地域と教育』としてまとめてきた。実践開始から10年を機に、その中から21本の研究を選考し、その論稿をそれぞれの執筆者が修正・加筆をして改めて取りまとめたものが本書である。

いささか強引ではあるが、それぞれ21本の研究をキーワード的に表してみれば以下のようなテーマが取り上げられたことになる。()内は掲載の章と項である。学校間交流による ITC 学習 (1-1)、意識と歴史学習 (1-2)、「遊び」と教育

*秋田大学 教育文化学部

(1-3, 2-4), 地域学習とその後の影響 (1-4), 空間認識形成 (1-5), 地域学習の在り方 (2-1), 小規模校の集合学習 (2-2), 平和学習 (2-3, 4-5), 地域とグローバル教育 (3-1), 地域的課題の教材化 (3-2), 地域づくり (3-3, 4-1), ごみと環境教育 (4-2), 総合的学習との関係 (4-3), 福祉教育 (4-4), 地域の伝統文化 (4-5), 多文化共生 (5-1), 風水景観 (5-2), 地域と学校 (5-3)。それぞれのテーマは実に多岐にわたる。しかし、通底するのは社会科教育のみならず、まさにタイトルにある「地域と教育」である。それぞれの研究は萌芽的感はあるが、その着想とアプローチには注目すべき点があいくつもあることが分かる。これらの研究は、全て実地へのフィールドワークを通じて実際の社会的事象と向き合い取り組まれたものである。社会科を主眼とした研究を目指す学生達は、大学院に入学して、社会科教育学に関わる理論や歴史的背景を学ぶだけではなく、実際のカリキュラム開発や授業デザインなど、実践的な力量形成も望まれている。社会科教育は、本来、教科書や資料集など二次的に加工、再構成され、叙述化された社会的事象の一方的伝達や効率的「詰め込み」によってなされることではない。学習者主体の、事実を知ろうとする知的探究の原点に立ち返り、叙述化された知識の習得に偏ることのない学習展開を目指すことが求められている。本実践では、こうした社会科の特質を踏まえ、実際のフィールドワークを通じて直接地域の社会的事象と向き合い、そこから研究の構築を試みているのである。さらには、「社会科」といった特定の教科教育のみならず、社会的事象を教育－学習の文脈でどう扱うのかといった本質的問いを投げかけているといえよう。

また周知の通り、研究に携わる者にとって、その研究基盤の形成期に受けた影響は、その後の研究スタンスに大きな影響を及ぼす。例えば、評者が学位論文で取り上げた郷土教育の小田内通敏でいえば、早稲田中学校勤務時代に出会った新渡戸稲造の『農業本論』や柳田国男等による郷土会的面々との交流である。いつ、どこで、誰から、何を、どのように学んだのか。そのことが、その後の研究人生に大きな影響を及ぼしていく。そう考えた時、本書の執筆者21名は、筑波大学大学院人間総合科学研究科教育学専攻（前期）、学校教育学専攻（後期）といった貴重な研究基盤の形成期に、井田氏（評者の指導教官でもある編著者をこうお呼びすることをご容赦願いたい）から、「地域と教育」を、臨場のアプローチによって学んだ成果と言える。とりわけ、社会科教育にとっては、筑波大学大学院人間総合科学研究科教育学専攻（前期）、学校教育学専攻（後期）とは、かつて上田薫、

梅根悟、長坂端午等の諸氏により戦後の新教育の中核とされた社会科誕生に大きくかかわった地であり、その後も経験主義的社会科の研究風土が培われた地である。加えて井田氏は、元来その研究基盤は地理学であり、社会的事象に対するアプローチは当然ながら臨場的である。こうした、学びの場、指導者から学んだ執筆者達の成果が本書なのである。そう考えた時、本書の「卒業生は地場産業の体験学習をどのように意味づけているか」(1-4)のアプローチの様に、現在の執筆者達の研究スタンスにどのような影響を及ぼしているのかを尋ねてみたくなる。

最後になるが、本書で取り上げられている「地域」は都市部ではなく、全て「地方」であり「田舎」である。今日の少子高齢化社会を鑑みる時、現在進行形の地域の変容、社会そのものの変容と教育の関係においても、一石を投じる書であることを加えておきたい。

井田仁康編著『地域と教育—地域における教育の魅力—』

学文社、2012年、3,500円（税別）